

2021. 11. 28. 主日礼拝説教  
聖書：マルコによる福音書3章20～30節  
『聖霊によりて』

「食事を何とか摂ろうとする弟子たち」、「救いを求めてイエスのもとに押し寄せる群衆」、「気が変になっていると取り押さえに来たイエスの身内」、「ベルゼブルに取り憑かれていると騒ぎ立ててイエスを追い落とそうとする律法学者たち」……。あまりにも騒がしい書き始めから、唐突に物語は混乱の中に進められて行きます。

元来、この記事は21節のあとに31～34節が直結されていたようなのですが、マルコによって22～30節が挿入されました。そしてここに「ベルゼブル論争」と呼ばれる記事が完成したのです。

「ベルゼブル論争」とは何か。簡単に言えば「悪魔払い」なのです。

イエスが行う数々の不思議な出来事に業を煮やした律法学者やファリサイ派の人々が揶揄中傷のため「悪霊の頭の力で悪霊を追い出している」と攻撃に転じてきたというのが真相です。

そもそも悪魔払いの儀式は歴史がとても古く、主に二つの方法がありました。一つは聖なる力による悪魔払いです。聖なる力とは、俗に言えば家族愛や思いやり等の信頼といった地味なものです。それに比べるともう一つの方法である悪霊の力は一転して派手なものでした。それは暴力的な恫喝やにぎにぎしい舞台装置による呪術でした。つまり、悪の力を借りて同じ悪を追い出すということでした。そしてこの方法が当時は広く行われていたらしいのです。

正統なユダヤ教は「悪魔払い」は本業ではないと言いつつ、こういった方法を今に伝えております。ユダヤ教から見ればキリスト教は正統ではありません。それゆえに悪をもって悪を打つという具合に、ユダヤ教にしてみればキリスト教など悪霊の一つでしかなかったということなのです。このことは自分たちで責任をとれないことは、すべて「悪霊に取り憑かれた」として切り捨てるのが容易であったということです。このことの意味するところは、一方的に相手を支配するということなのでしょう。つまり、自分と同じものは受け入れるが、少しでも違うものは絶対に受け付けないということです。

こういったユダヤ教の「上から目線」に対して、イエスは「聖霊を冒瀆する者は永遠に赦されず、永遠に罪の責めを負う」(29 節)と言われます。

わたしたちは一つであるようにという祈りは持ちますが、同じであるようにという祈りは持ちません。それは、同じであるということと、一つであるということとは、まったく別のことであるということなのです。

同じであるということとは、対立も緊張も分裂もなく、従って変化も発展も成長もなく、命はそこにおいて存在しません。同じとは死そのものなのです。これに対し、一つであるとは、異なるものが対立をはらむ緊張の中で、忍びあい譲り合い、理解し合い愛し合いつつそれぞれの分々に応じて働き、助け、補い合って結ばれてゆく努力の積み重ねであり、創造的ないとなみとして、まさに命そのものなのです。

イエスはこのように、画一化して同じものを生産しようとし続けるユダヤ教を頂点とする古い体質に対して、そして、自分では決して責任を負うことなく悪魔払いに逃げ込んでしまう方法論に対して、福音とは誰もが生きることへと参加出来る価値あるものへと高めて行かれるのです。このことを「聖霊による働き」として示されるのです。